

温暖化現象に想う

国立循環器病研究センター
心臓血管内科・臨床検査部長
鎌倉 史郎

今年の夏も暑かった。筆者の小宅は裏六甲にあり、関西の中では、比較的涼しいところに居住しているつもりだが、9月の中旬になってやっと、夜間のエアコンが不要になった。5～6年前までは窓を開ければ、夜はクーラーなしで寝ていたことを思えば、7月中旬からずっとエアコンのお世話になった今年の夏は、単に気温への耐性低下だけで説明できない異常な暑さがあったのではないかと思う。蝉も9月中旬まで鳴いていたし、いつもは9月末に咲く金木犀も10月中旬になってやっと開花した。

地球の平均気温は1906～2005年の100年間で0.74℃上昇したと報告されているが、日本の平均気温も1960～1990年代と比べ、最近10年間で1℃近く上昇している。年平均気温が1℃上昇することは、東京～宮崎間くらいの緯度差の気温変化が生じて、温帯から亜熱帯に近づくことを意味する。大阪も万博の頃までは平均気温が15℃台で、現在の千葉や岐阜の気温に近かったが、昨年の平均気温は17.2℃で、宮崎の気温と同じになってしまった。どおりで冬に雪が降らなくなったわけである。現地に住み始めて以来、12月になると車にスノータイヤを履いており、冬期には最低数回はタイヤのお世話になっていたが、去年と1昨年は1度も雪道を走らなかった。来年からは、履くのをやめようかと思う。

この温暖化現象は、産業活動に伴う人為的な温室効果ガス、特に二酸化炭素やメタンガスの排出が原因とされているが、一方で今年の春頃には、今年の夏は暑くならず涼しいのではないかと期待があった。それは地球の磁場や太陽の黒点数が変化し、地球の気温が低かった17～18世紀の状況に似てきた

との報道があったためである。それによると、北極と南極の極性はプラス・マイナス、マイナス・プラスと11年周期でひっくり返り、磁場の反転を繰り返しているが、そろそろ変化がおきる時期であるにも関わらず、変化しないだけでなく、北極と南極がプラス極で、赤道付近に2つのマイナス極ができて異常な4極構造となっている。地球の極性の変化は太陽の黒点数に関係し、黒点活動の最も活発な時期に変わるのだが、その黒点数は前回の周期の半分近くに低下しているために、極性の異常がおこっているとのことであった。つまりこれらの諸現象は太陽の活動の低下を意味しており、そうすると、地球を包む太陽の磁場が減って宇宙空間から飛来する宇宙線が増え、大気中の水蒸気と反応して雲ができやすくなり、日射量が減って雨や雪が増え寒冷化することだった。まるで「風が吹けば桶屋が儲かる」式の屁理屈に近い気もしたが、一方で、天明の大飢饉や享保の大飢饉はこれら磁場、黒点の活動の低下に加え、火山の噴火が一部加わって起こったと説明されると、あながち間違いでなさそうに思えた。

しかしながら、今年の西日本の夏の天候を決定したのは、後者ではなく前者の温暖化現象であったようだ。温暖化を防ぐための石炭や石油による二酸化炭素排出規制の重要性に関しては、脱原発、反原発運動の高まりに反比例して、報道される機会が減っている気がするが、このまま果てしなく温暖化が続くと、そのうち日本の大部分は亜熱帯の国々のようになる可能性がある。寒くなりすぎるのも困るが、季節が夏と秋または春だけになり、常に汗をかきながら過ごす毎日も味気なくて困る。